稿本あゆひ抄と刊本あゆひ抄の成立

竹岡正夫

昭和三十年四月『金城学院大学論集第五集』において酒井秀夫氏により、富士谷家に伝えられて来た『稿本あゆひ抄』の存在とその書の体裁・および目録・おほむねの内容とについて報告があった。筆者も鈴方健一郎氏の斡旋によりこの稿本の研究は既に大体すませており、この稿本の全文をいずれその索引と共に公表致したい予定であるが、ここには主としてこの稿本と刊本あゆひ抄との関係を中心にその価値につきいさゝか考察してみようと思う。

稿本あゆひ抄の作者

この書名を『稿本あゆひ抄』と言うのはその内容より推定してつけた仮称で、この書にはたゞ木口に「安由比」と記されているのみで、表題も著者名もない半紙判百枚、藍色の表紙をつけたものである。この著が富士谷成章（なりあき）の自筆稿本である事は、すでに酒井秀夫氏が、㈠この書が永く富士谷家に伝わってきたものである点、内容を刊本のそれと比較して、またこの書自体の抹消、補訂などの書き様から成章自身の草稿本以外とは考えられない点、㈡他に成章自署のあるものの筆蹟（酒井氏は明治四十年十月刊の福井久蔵博士の『日本文法史』所収の写真と比べておられる。その写真になっているものは『明治五年月令』として静嘉堂文庫に現在は蔵せられているものである。ただし同文庫には他に成章晩年の自筆と考えられるものなどがある）とこの書の筆蹟とが同筆である点[註1]の三点から確認しておられる。筆者はなお右以外に、次の二点からさらにこれが成章の草稿本であることが証されると思う。その一は成章の子御杖のあゆひ抄書入の文を調査すると、その書入中には、引用のしかた、引用文の内容より判断してどうしても成章のあゆひについての文を一部引用して書入れていると考えざるをえない文のあることである。これは別に論じようと思うが、とにかく以上の様に推定される文はすべてこの稿本にそっくりあるのである。その二は、保田光則がその著『脚結抄増補』（京大所蔵本）の中の「何さへ」の説明中「そへ」に触れ、

北辺も同語とや思ひけん。この抄草稿の中に著聞集のそへにといふを可引歟といへりとぞ。（五二ウ）

と記しているが、刊本には「そへに」についての説明は全くない。ところがこの稿本において、「だに類」の中で「何だに」「何さへ」の次の「何そへに」の条何において、

けふそへにの部斗（註2）也。見かさし抄。著聞のそへにといふ可引歟（五三ウ）

と説いている文と一致するから、この稿本が正に「北辺」の「この抄草稿」である事が立証されよう。

稿本あゆひ抄の成立時期

この書の成立時期については確言できるものがないが、その内容により刊本あゆひ抄（安永二年序）以前である事は勿論であるが、また『かざし抄』（明和四年序）よりは後である事は次の点より証明される。

㈠ かざし抄では、国語の時代を次の様に四時期に区分して、刊本あゆひ抄の如くに「六運」という六時期には区分していない。

上古　神世より万葉集の時までをひろくさしたり
中古　三代集の時をいふ
中ごろ　三代以後
ちかき世　文治建久以後両朝以後其所にあたりて心得へし
（序言）

刊本あゆひ抄では

六運　開闢より光仁天皇の御世までをおしなへて上つよといふ。其後より花山院御世まて二百五年を中むかしといふ。後白川院御世まて百七十二年を中ころといふ。四条院御世まて八十四年を近むかしといふ。後花園院御世まて二百二十二年ををとつよといふ。其のちを今の世とす。（おほむね下）

とし、従って刊本あゆひ抄の本文の時代名は右の時代名によっており、かざし抄で用いている時代名は「上古」は二回で、「中古」は全く見えない。[註3] これに対し、稿本では巻末の「おほむね」で、単に

一、かみつよ中むかし中頃近むかしをとつ世今の世（八四ウ）

と時代名をあげるのみで、「六運」の文字も詳細な時代区分も説かず、本文中でも、かざし抄に用いている時代名と、刊本と共通の時代名とが混用され、「上古」は十一回、「中古」は五回も見える。この稿本の内容が、かざし抄と刊本あゆひ抄との中間に位するものであるためであろう。

㈡ かざし抄では、オ・ヲの所属がなお旧来通り誤っているのに対し、刊本あゆひ抄ではそれが完全に正されているため、本居宣長といずれが先に正したかが従来問題になって居り、筆者は先に拙稿「富士谷成章と上田秋成との関係」（『国語』ニノニ・三・四）の中で秋成との関係から成章の方が宣長よりも早かったであろうと推定したのであったが、この稿本においては、例えば「あいうえを」と書いて同筆で「を」を「お」と正している所や、又最初から正しく書いている処もあって、「経緯弁」[註4]こそ見えないが、この稿本の所在により、この成立は遅くとも刊本あゆひ抄の成立（安永二年）よりも早いはずであるから、宣長の『字音仮字用格』（安永四年脱稿）よりも二年以上早く成章が正したという事が実証される。しかしてこの稿本の成立はやはりこの点からもまたかざし抄と刊本あゆひ抄との中間に成立したものである事が言える。

なおこの稿本の書体などが、刊本のそれと極めて酷似している点から推して、稿本の成立は刊本の版下が成章により書かれた時期とそう隔ってはいるまいと推定される。

『本抄』との関係

刊本あゆひ抄には『本抄』というのが計一一七所見え、それを分類すると次の様になる。

㈠ あゆひ・継あゆひにつき「見本抄」「引歌見本抄」の如くにした所（一〇二）

㈡ あゆひ・継あゆひのうけざま・打合につき「見本抄」の如くにした所（一四）

㈢ あゆひ（「何ゆく」「何あふ」）の立居につき「見本抄」とした所（二）

㈣ その他。これは次の二例。

(1) 第一・第二・第三、みな「ばや」を略したる詞也。「ばや」の事猶本抄にくはし。（疑属何や「伏や」）

(2) 又里言にウをいふ時。いたてにつゞきてはたよりあしければ「見う」「着う」といふべきを「見よう」「着よう」などョをくはふるは、いふかひなき事なれとも、里言としてあつるうへはとて本抄にもしかあてたり。（将倫何ん）

右の「本抄」とこの稿本との関係はどうであろうか。稿本中にも見本抄としたのが九例、「引歌見本抄」という風にしたのが十二例見え、右の単に「見本抄」としたものでも、

後撰ニ八首拾遺ニ二首見本抄（将類何ちん）

の如きでわかる如く、結局すべて引歌について「見本抄」としているのであって、その事は、「おほむね」に

あたり〳〵其詞のみしるして、里言をあてつつ、引哥をばもとの抄にゆづりて、此抄にはのせず（八三オ）

と述べてもいるのである。而して稿本においては右に見たような、刊本において㈢㈣の場合には本抄を見よなどと記している所は一例も見えない。そのために稿本で言う「本抄」というのは、引歌のみを集めた証歌集ともいうべき別綴の書を指しているものと推定できる。(註5)稿本では殆んど引歌をあげず、その場合には、代りに○や●や×などのさまざまな符号が並べられていて、その符号の一つ一つが証歌集にある引歌の一例一例の代りをしているのである。

こゝにしもいふまじき事なれど古今に○此哥のつめとて名だかき哥也。（中略）又後拾に◉此哥は本句の末なれどのつめの勢に似たり（の類何の）

これらにより、稿本あゆひ抄には、別に証歌ばかりを集めた書が座右にあった事が推定できると思う。

ところで、右の刊本の㈠については別論する所存であるが、うけざま・打合については刊本の方にない「や」や「ぞ・こそ」などの打合図や説明が稿本に見られる。㈢については、稿本では「何ゆく」「何あふ」は後掲の目録により知られる通り、巻末の補訂された目録に名称が見えるのみで本文中には全く見えない。刊本あゆひ抄の「由久身」「阿不身」の説明も極めて簡略な点から考えても、刊本のは稿本成立後に挿入されたものと考えられる。㈣に該当するのは、稿本に

(1) たれあれなれ此三条ヤヲ下ヘマハサヌガヨキヨシ可弁。又チノメヤナドノ類皆ノメハヤト云ハヲヌキタル也。此事一条ノエヤトナヅケテ細ニ弁ズベシ。（十ウ疑問、何や何ましの欄外に補記）

(2) 又アカエケニ承たるは今も其定にてイキに承たる見ン着ンなとは詞のたよりあしければョの字を加て里にいひなら

へり。いふかひなき事なれど里言とてあつるうへはとてそれにしたがひてつけたり。近ごろまでもかくいはざりけるにや、うたがひには見ウをメウときこゆる様にいひならへり（六二ウ、将類何んの欄外補記）

とあって、ここには「本抄」云々は見えない。もし細かに弁じた再稿本の如きものがこの稿本と刊本との間にありとすれば、刊本の右の㈣でいう「本抄」とはその再稿本という事になるであろうか。再稿本の存在は全く不明であるが、いずれにしろ、稿本で言う「本抄」とは別の証歌集、刊本でいう「本抄」とは、稿本でいうのと同じ証歌集の場合が大部分で、他にこの稿本かまたは再稿本があるとすればその再稿本をいっている場合も少しあるという事になる。なお稿本の巻末のおほむねで、

一、はしがき部下、、　つまがき（一行にくたりをならへてかきたり）　ちひさく

うらかき　条の後にひきく　みな本抄のすかたに

よりていはせたり（八三オ）

とあるのは刊本にも同様のが見られるが、もしこうした内容の「本抄」が稿本以前に既にあって、本抄のすがたがその様に整然としているとすれば右の様に「二行に」と一旦書いてそれを消したり、また後にも述べる如くに、稿本の巻末で種々その体裁について考えたりする必要はなかったはずであるから、右の文は一種のゼスチュアであろうと断定される。

稿本成立過程

この稿本を細かに検討すると、あゆひ抄の成立の過程、それから推して成章の思考過程やその進歩の跡が興味深くうかがえる。けだし当時劃期的なあゆひ抄の成立過程を具体的に示す資料として国語学上重要な文献である。ここには紙数の関係上、一々の内容にわたる事を避けて形式的な面のみを概観する。

稿本では、巻首と巻末とに目録があって、巻末のは本文を書き終えて後に組織立てたものであり、巻首のは筆をとった最初の構想を示すものである。これらと刊本の目録と比較する時、その体系化、組織化の点において著しい進歩のあとがたどられる。

巻首の目録（上の番号や○は朱書）

○四誂詞一　なひきよや　なんねな何そ
○五禁詞二　なゆめ
○二疑詞三　そかや
○一咏詞四　やなよかな
○三欲詞五　はやがなマ、

巻末の目録（）の字は抹消したもの

巻一――
五（詞）属
咏（詞）属
疑（詞）
願（詞）
誂（詞）
禁（詞）
巻二――
（十八）（九）廿家
（頭注）以下其ウクル位ヲ以次第スヘシ
曾家
乎家
六そ類
七を類
八は類

刊本の目録

巻一
五属第一
咏属一
疑属二
願属三
誂属四
禁属五
巻二
十九家第二上
曾家一
乎家二
波家三

九も類
て類 たり つゝ付 つ付
十三と類
十二の類 が付
〔頭注〕此中二類可有也○十四し類 せは付
しか類
十一へ類
み類 さ付
十に類
かし類
のみ類 はかり まて付
〔頭注〕くの類といふへきか○らく類 (ら)けく ま付
たに類 さへ付
より類 から ゆゑ付
もて類 名して付
めり類
去類
来類
将類 又ひゝきもしともいふ
有類 かる えける付

波家
毛家
仁家
辺家
乃家
止家
然家
(羅)良家
乃美家
良家十
駄仁家
能美家十一
与利家
陀爾家十二
毛天家
余利家十三
南家
那牟家十四
毎家
碁登家十五
乍家
毛天家十六
当家
加保家十七
加天良家
那加良家六
(中)顔家
加天良家十九

六倫

毛家四
仁家五
止家六
志家七

巻三——

辺家九
十九家第二下
乃家八
良家十
能美家十一
陀爾家十二
余利家十三
那牟家十四
碁登家十五
毛天家十六
加保家十七
那加良家六
加天良家十九

巻四——

六倫第三

〔頭注〕(ハタ)将類 何はの下に出す別に部を立へし

可類
不類 ねな てなく な しに付
被類
物類
(程類) 程はあゆひにあらす可删
儘類
毎類
乍類 何ゴメといふに似たり何ナリニ何グチ
也類 ならく
苗類
為類可入也
令の類可入也 たのむるおとすの類也
如の類可入也 何も何哉の下ミルヘシ脱詞の部
なんの類可入也 哥ニハ必……トウクル也

可倫
不倫
将倫
有倫
去倫
来倫

(七)十三体

天体
世之体
也体
被体
令体
為体
如体
○行—
○敢—
●遣—
(中)雖—
●兼—
(○顔□如何) 不明

十二身第四

氐身一
之身二
咩利身三
那利身四
由久身五
阿不身六
也留身七
加奴身八
被身九
令身十
為身十一
如身十二

巻五——

可倫一
不倫二
将倫三
有倫四
去倫五
来倫六

七隊	八隊第五
美隊	美隊一
加志隊	久隊二
久隊	介隊三
計隊	加之隊四
㊥難隊	奈倍隊五
免利隊	母乃隊六
物隊	八多隊七
苗隊	加天隊

右のうち、巻末の目録で符号をつけたのや小字の部はその所属が容易に決定しなかったものである。また巻首目録の終り「可入也」としてあげている部は、稿本本文においてもその説明は極めて簡略で、ほんの心覚え程度のものと見え、例えば「令」などは

令

○三ミ	セズ	トヨムル	シメテ
○三キカ	セソ	タノメシ	
○一句ハ	ス	タノムル	
○二オクラ	サン		ふらしめし しめ
四チラ	シヽ	何す 事ノアラマシ也	
○三クラ	セル	何シムハ(動ニ)後世ミエス	
○三シラ	セン	何む (事)シ様ノ本 シキ 様ノ末ヲ受ク	
○一フル	寸	アツム	アツムル

の如き状態である。

本文の説明に当っては、始めの誂詞では、「えぬき」(命令形。刊本なら「目」とするところ)「ね」「よ」「あかなん」(ア段より続く「なん」。刊本なら「来」の「なん」とでもするところ)「なゝん」「や何」という風な見出し語の下にそれぞれ説明しているが、疑詞まで来て、始めて見出しの語の上に一々「何」をつける事にし「何か」「何かに」という風にあげ、再びそれ以前の見出し語の上にもすべて「何」を冠している。この見出し語のあげ方は容易に決定しなかったと見え、表紙裏には心覚え事項が記されているがその中に、

何 ナニ〳〵ノ詞 何ニテモコメテ云

とし、巻末の覚え書の中には、

何ノ事○(アユヒノ何 何ヤハノ類也)○
又何は○を事へきか

更に裏表紙の裏に書かれた覚え書の中にも、

何ト云詞ニ字様カ又傍批ヲサマ〳〵ニスルカシヲ分ツヘキカ
又某

ともあってその苦心を示している。これにより、成章があゆひの語だけを、例えば「や」「の」「らん」などの如く単独に抽出する事を憚かっていた事が推定できる。あゆひとは実にその様に、

「詞」から切り離されて抽出されるべきものでないと考えていたからである。こうして刊本ではすべてのあゆひに「何」をつけて、「何や」「何と」「何らん」という風にしているのである。

刊本では「おほむね」が巻頭におかれているのと巻末に置かれているのとが出ているが、稿本では、以上の本文が終了して八十枚目から「おほむね」に入っている。而してそれは刊本のように上・下には分けられていないが、多くの段落に分かれて居り、各段の頭につけられた番号と符号とによればおほむね全文は二十三段と、十六の術語とに分かれて居り、おほむねの最後に「十七則」[註6]と注している事から考えて、右のおほむね全文の内容は上・下に分かれ、すべてで十七則から成っている事がわかる。この各段の順序はまち〳〵であって刊本のと大いに異っているが、内容には大差なく、刊本のおほむねでは別に記されている様になっている「経緯弁」「ひき合のさだめ」も、「師説深き理あり」とした「内外の詞」[註7]「裏表の詞」「神しるし」の詳しい説明など全くなく、特に「神しるし」の如きはその名目すら見えない。その他、稿本にあって、刊本にないおほむねの説明の中には、あゆひに「もとあゆひ・末あゆひ・うちあふあゆひ」（八九ウ）或は「中の詞・中下の詞・下の詞」（一〇〇ウ）の如き種類を考えているのなどは注目すべきものであろう。「もとあゆひ」とは格助詞の類、「末あゆひ」とは文末に来るあゆひ、「うちあふあゆひ」とは係結その他呼応しあうあゆひであろう。

稿本巻末には、「おほむね」の次に、目録が補訂され、次には後述するアクセントの考察が行われ、その後は、彼のいろ〳〵の心覚えが記されている。そのうちにこの書の体裁をどうするかの心覚えが記されていて、例えば、

あゆひ結提　序言　用法　例尺　引哥　傍訓　里言（一〇〇オ）

は本文の説明の要点を示したもので、稿本では必らずしもこの様に一貫していないが刊本では大体この様に一貫している。また、

全部に上層をまうけ置て詞の内に標せすして入たるあゆひの例を書かゝけて里を付へき也

とも考えているが、これは稿本・刊本ともに実行されていない。さらに、

為有二語むつかしき事（裏表紙ウラ）

というだけの心覚えもあれば、

仮アュヒ　たとへは疑そはは引哥アリ疑何そはは引哥見及はねとあゆひからさもよむへきに疑なけれは哥見えすとてさてやますして目録をいたす也（同右）

の如くに記されているのは、あゆひ抄の中で挙げているあゆひの中には、その用例は見当らないのにもかゝわらず彼が理論的に創作したあゆひもある事を示している。事実、刊本にあげている継あゆひの中には実例の見当らないものもある。

以下この稿本中より注目すべき点のみをあげて考える事にする。

「名」について

刊本では名・かざし・よそひ・あゆひを四具と称して共に考えているが、稿本では名を除外して常に三具と言っている。例えば

何とも　何は名三具みなうけたり（冊五ウ）

この両者の間に、筆者は彼の深い考えがうかゞえる様に思う。

刊本にも記しているが「名をもて物をことわり、よそひをもて事をさため」という。これに対し「かざし・あゆひをもてことはをたすく（稿本では「あきらむ」としてこれを「たすく」に改めている）」としている事から考えて、「名・よそひ」と「かざし・あゆひ」とは次元を異にすると考えていた事が諒解されよう。名・装は、物や事の世界、即ち実質概念の世界のものであって、鈴木朗の『言語四種論』で言う「詞」に相当する。しかもその装が、かざし・あゆひとともに三具とも考えられるのは、装の表わす実質概念の面ではなくて、朗が「テニヲハ」とした活用形においてである。即ち、装は、実質概念を表わす点（次項で説く装の「本」）では名と同類であり、話手の広義の陳述を表わす点（具体的な各活用形）では、かざし・あゆひと類するのである。かくして、この装の二重性格を軸として稿本の様に、名が三具以外に別にされたり、或は刊本の様に一緒にして四具と考えられたりするのであろう。なお、刊本においては、名はどういうものを言っているのか具体的にはわからないが、稿本の次の説明を見ればほぼ推測できよう。

サ　ソラサウサなど名に属していふさまなれどもサの字の勢にて名と同じ事になるゆゑ也　時折も（表紙裏）

時　折　皆に又はといふあゆひをくはへてみるべし。さるゆゑにあゆひをうけたると同心得にみるべし。名とみるべからず。日も同か。今同　おきひん時や。秋なき時や。（同）

あふぞうれしき。きくぞさびしき。などあふ事きく事といふ事の字を略したるもの故に名とおなじ心得にてうたがひなし（サウ何ぞ何）

何へ　何は名のうち土地居所方角のもじなり（四四オ）

名　其此ソコナドモ名ノ内也　皆モガナナドノミナ名也　ソレコレ何ナドノカザシ皆名也（裏表紙ウラ）

名ノ事ニナル詞　体用ニ通ズル字也。タトヘバ心ヤドリイホリナド也。心（カ）シテヤドリテイホリシテナドイヘバ用也（同）

半語全語（註）10　三具ノ内ノ別也　名ハ皆全語也　（同）

よそひ・装図について

刊本あゆひ抄、及び御杖の書などの記事から、『よそひ抄』の成立には疑問があるのだが、稿本にも『よそひ抄』について三ヶ所記事がある。

えぬき（中略）但よそひの（なぶき）足によりてえぬきになびかぬもありくはしくはよそひ抄にいふ（四オ、誹諧）

なにおふなにおへるなにおひなどよむ。皆負の字にて逢合等の心にあらねばあふとかくべからず（中略）。負とは名につく事也。くはしくはよそひ抄にいふ（四十オ何し何は、刊本の同条にもあり）

何らん（中略）無末は本に末をかねたることよそひ抄にいふがごとくなれば（六三オ、将類）

稿本を見て行くと次にあげる様な根拠から、この稿本以前に『よそひ抄』が成立していたとは考えられず、この稿本の進歩と平行して成章自身の装についての考察が次第に明確になって行ったものと考えられる。その一は「末・なびき」が二通りの意味に用いられていて刊本の様に統一されていない事で、

ナビキ　ヨソヒノアシ也。キエユルミユル等ヲ云　スエノ上

也（表紙裏）

スエ　ヨソヒノアシニアリ。ナヒカズシテミユキコユナドス

ワレル也（同）

あゆひのなびきにかよふは　しせし也　ぬ不　かほなる　まし

らん　ん　けん　じ（八五オおほむね）

等から考えて「末・靡」が刊本の如く明確に活用形の名称になりきって居らず、「末」とは単に言い切り、続かない形で、必らずしも刊本の様にいわゆる終止形とは限らず、「靡」も「詞」に続く形で必らずしも刊本の様に連体形・終止形の語尾ルとは限っていない様でもあり、一方では又次にあげる装図の如くに刊本と同様に言っている処もあるのである。又刊本では来（アラハシキタク）・往（スエ）・末（メノマヘ）・目などと称せられている形が単にアカ・イキ・ウク・エケなどと称せられ、その他の名目においてもそういう段階にあるのが、

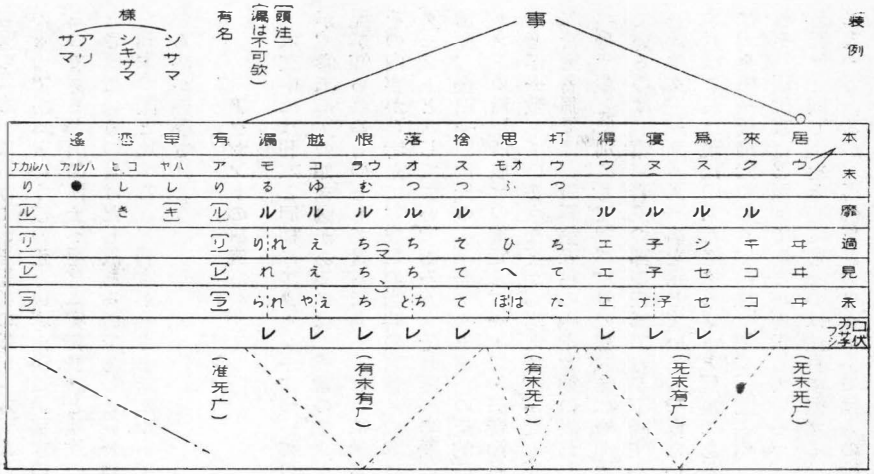
何ぞ何　上の何はかざし又半語のいきえけ（又はあゆひをうくる）也。（廿オ）

何こそ何　上の何は名又は（事の）半語のいきえけ又はさきのうくいき又はかざしあゆひさま〳〵にうけたり下の何は事さまあゆひいづれもえけつめなり（廿一ウ）

何かし　何は誂のえ伏を伏又は…（四十七ウ）

（一）内は消された文字、〔〕内は補入、傍点は筆者）

などで知られよう。それが三十七枚目の「の類」の条に「此部以下ヨソヒノ名目正シ」として以下、過・なびき・引、その他刊本に見える名目がほゞ用いられる様になっているが、なお右の例の最後の如きものもある。又、孔・芝（アリナシヤマ）状の如き文字も一切見えず、たゞ「有名・シ様」の如くに記されている。又先に見た令の例も



（上の図の説明）

1　ゴチのルレは朱字でその縁を黒でかたどっている。

2　ひらかな及び〔〕の中の漢字は朱字。

3　……は朱線、

|・|・|は青線。

4　〔〕の中の文字は青字。

5　「カサ子フシ」のみは萌黄色で書く。その横の□は虫喰のため不明

6　○●は朱

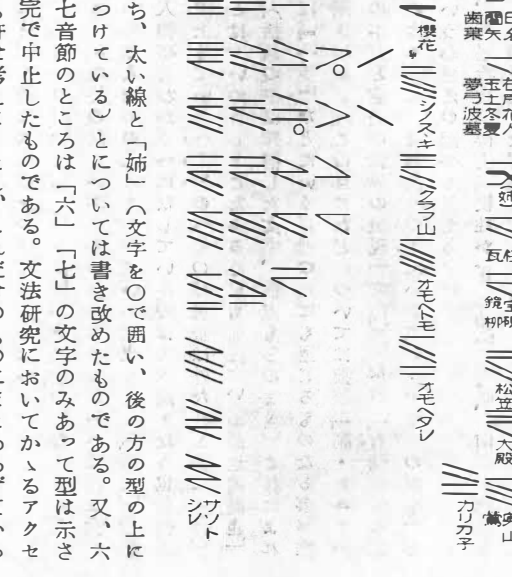
あり、装図においても「伏目・立本」などはまだ全く出ていないし、特に刊本では「さまに図むねあり」としてあげている一つに「かへしさま」があるのであるが、稿本では全くその名も見えず、従って状は三種だけである。以上によっても、『よそひ抄』は、稿本の進捗と共にその都度心覚え程度のものは平行して記されていたにしても、まだまとまった書にはなっていなかったと断ぜざるをえないであろう。恐らくあゆひ抄成立後にその完成は計画されていたのであろう。稿本の「装図」は「装例」として前頁の様な図をあげている。

右の図で注目すべき点はまず「本」についてであろう。右の表では活字にするため線がうまく出ていないが、「本」の段には初め「居」以下の漢字を記し、「末」の段上半に「ウ・ク」以下の文字を記し、下半には「打」以下の語尾「ツ」などを朱書し、後にその「末」の段上半の「ウ・ク」以下の段の下に横線を引いて「本」の中に編入しているのである。刊本では、漢字の段には活用形名なく、「本」の段には「う・く」以下の段のみが当てられている。この両者の考えを検討する時、始め、装のそうした漢字で表わされる実質概念を「本」とし、次にこの実質概念がことばとして具体形に現われ文中に用いられる形を各種の活用形とする。今、これを表示する時は、実際は実質概念を表わす装の「詞」としての面と、活用形により種々の陳述面を表わす装の「テニヲハ」としての面とは切り離し難いものであるから、便宜上、まず稿本の後の訂正の如くに「ウ・ク」以下の音を「本」とし、更に刊本になると、漢字の部分も、活用形を中心とする装図においては「本」からもはずしたと考えられるのである。しかし、決して装図の「本」にあげている語幹の類が「本」なのではなく便宜的のものであるという彼の正しい考えがこの稿本の図から推察できるのである。山田博士が用言に実質概念と陳述の力とを認めようとされているのもけだし故ある所であるといわねばなるまい。なお刊本の図と比べると、刊本が「さま」について一段と進歩している事が理解されよう。

アクセントの研究

本文中には刊本と同様にアクセントについての詳細は見えない(註11)が、巻末に次の如き図があるのは、成章のアクセントの研究の状況が知られるものとして貴重である。ここに示されているのは、その内容から考えて、成章の当時の京都（成章は京都の人）のアクセントと断じてよいであろう。それぞれの語についての型の分類や、金田一春彦氏の「国語アクセントの史的研究」（『国語アクセントの話』所収）の推定と、一・二・三音節名詞については殆んどが一致している点などから考えて、かなり正確精緻である。二音節名詞では、所謂第五類の「雨」類の表わし方は注目を要し「舟」類とは別にして、二本目の線（第二音節）が途中で屈折しているのは「第二音節の部の内部で音が下降する」（前記、金田一氏論文、一九六頁）事を示しているのではないかと思われる。すればこれは現代の京都アクセントと同型である。三音節名詞では、金田一氏推定の如く、「柱」類、「梁」類、「薄」、ともにそれぞれ現代京都と同型である事を示しているが、「鏡」類は『補忘記』と同じ型を示しているのは注目に値する。「柳」もこの類に入っているが、現代京都アクセントでは人の姓の場合は「柳」

は「鏡」などと同型のアクセントであり、植物名の時には「形」類と同じアクセントであるから成章が「柳」を「鏡」類の中に入れている一事を以って誤謬とも速断できない。後半に音節を示して型のみ図示しているのは前半の考察を整理したものであろう。これらは実際のアクセントを帰納したばかりなのか疑問である。



右のうち、太い線と「姉」（文字を○で囲い、後の方の型の上に○印をつけている）とについては書き改めたものである。又、六音節、七音節のところは「六」「七」の文字のみあって型は示されず未完で中止したものである。文法研究においてかゝるアクセントをも併せ考えようとし、これだけのものにまとめあげているのはけだし成章を以って最初とし、その着想もすばらしいと言わざるをえない。このアクセントの研究と言い、よそひの研究と言い、これだけの内容を持ちながら未完のままに終っているのを見るにつけても、かえすがえす成章の早世が惜しまれるではないか。

以上は稿本あゆひ抄についてごくその概観を考えて来たのであって、各あゆひの説明や考え方については一層注目すべき考察や貴重な説も少くはなく、又『冠辞考』『余材』『奥呂』[註12]などの書名も見えていて、種々研究すべき問題を数多くはらんでいるのであるが、紙数の関係上以下は他日に譲る。しかし、右にあげただけを見てもこの稿本の価値は、刊本と切り離しても刊本とは別に絶大なもののある事が知られると思う。（一九五五・五・一五）

——文部省科学助成補助金による研究の一部——

（註）1、刊本あゆひ抄の版下も成章の自筆である。

2、後撰集恋五、大和物語「今日そへに暮れざらめやはと思へども堪へぬは人の心なりけり」。其他。著聞集「おのれは聞ゆる文学かなといへば、そへにといらへてのれば、聞ゆる壇光かなといふ。又そへにといらふ。」（巻十六）。

3、佐藤茂氏もあゆひ抄の六運の用語例につき調査されている（『国語国文学』1、2、3）。

4、「世にたてぬきのことわりしらぬ人、あたてのおもじをわたてにおき、わたてのをもじをあたてにおくはあやまれり、師説たてぬきの弁あり」（あゆひ抄おほむね下）

5、御杖や福田美楯のあゆひ抄書入には多くの証歌を補っているが、それはこうした書によったのかもしれない。

6、始め「十六則」と朱書し、その「六」を「七」と黒で改めている。又、刊本おほむねで、「下」になるものには○印を、術語には△印をつけて区別している。

7、「内外の詞」については稿本中に次の様な説明が見える。「内外の詞といふことありあら〳〵といへは内は我うへ外は人物事の上にまかせていふ詞也されと(哥に)(螢)人物事をわかうへになしていふ時は又内詞となる也行螢雲の上まていぬへくはのへくの類也螢は外なれと螢に(行)とはゝいぬへしとこたふる心をもちていふ故也内詞也」(括弧の中は抹消した文字、傍点もとのまゝ)これによれば『一歩』などにいう自他の別にも通じるものなる事が推測される。(この自他などについては拙稿「詞・テニヲハの本質と意識の世界の表現」参照)。なお「有情無情の詞名つ◆へし 有類何りの下にいふテアルテキルの類也」という心覚えの記事も見える。

8、松尾捨次郎博士『校註かざし抄』解説、山田孝雄博士『国語学史』など参看。

9、刊本、刊記不明。『北辺成章家集 文詞之部』所収の「仮名札五式の序」により明和五年成立の事がわかる(拙稿「富士谷成章の著書について」『国語国文』二〇ノ三参照)。

10、この術語については別論したい。結論をいえば、例えば木枝増一氏が、動詞についてであるが「活用形がそれだけで単独にある意味を表すもの、即ち、他の単語に連続することなしにそれだけで動詞としての職能を果し得る」「単独用法」のもの、これが全語で、体言その他も入る。半語とは「活用形がそれだけでは単独に意味を表すことができないもので、助詞や助動詞に連なるために用ひられるもので、他の単語が連なって始めてその動詞の職能が全くされる」「連続用法」のもので用言の未然形、仮定形(口語)の如きがそれに当る。(木枝増一氏『高等国文法要説品詞篇』一一四ぺ)。この区別は文法上重要である。

11、稿本おほむねにあげる「三こゑ」の名称は刊本のそれとは全く異っている。左の括弧内の名称刊本ので、刊本には三音節の例はあげていない。

一、なほこゑ 井・箪・桜なとよむこゑ也 もろこしこゑの平なり(ゆきこゑ)

三、おもひ(初め「とり」として改めている)こゑ 日・花・柱なとよむこゑ也 上なり(かへりこゑ)

二、とり(初め「ひき」として改めている)こゑ 野(初め「火」と書いて改めている)・舟・薄なとよむこゑ也 去なり(たちこゑ)。

成章のいう平・上・去と契沖のいうそれとについての考察は拙稿「あゆひ抄術語考」(『香川大学研究報告』第五号)参照。

12、『奥呂』はかざし抄序言に十二部の抄の一としてあげているが未詳のものである。御杖にも何々奥呂と称する書があり、「呂」の字に松尾博士は「書」の草体より来た誤写ならんとされているが、稿本あゆひ抄中にも右の如く記されているから誤写とは考えられない。御杖の著には『奥呂』

を一方では「奥筥」とも書いたものがあるから（『富士谷御杖集』巻二解題）、「奥筥」の略字であろう。又富士谷学派に成章遺伝と称する『奥呂九ケ条伝』（京大所蔵）があるがこれは明らかに後のものである。稿本には「豊玉姫の哥にあか玉の光はありと（中略）此は上古のうけやうなれとしもしの心をこれにて心うへし又然爾の心にて手にとりていふ心あり是奥呂也正面ニ見テ云心也」（三九ウ「何し何は」欄外）「凡あゆひにもかきらす哥詞に中古は上古を失ひ中ころは中古にたかひ近むかしの後は猶心得たかへる事のみおほし時に随ひてひたすらにたかひ行たるをは抄奥呂にやむ事をえす弁す」（一〇〇ウ）とあるのがこの書を考える上に唯一の資料となる。又御杖のあゆひ抄書入中にも「杖云観属にし哉なきは奥呂也」（頭属何も何しか）「つまもこもれりは孔往我もこもれりは孔末雨にまされりは孔末也此差別ヲ知ル事奥呂ニ曰」（有倫何り）、（本文）「本抄すつる例おほし」の頭注「是奥呂也」（何し）の如きが見える。稿本のもこの書入のも、右の『奥呂九ケ条伝』には該当する記事がない。御杖の著には『神典七神三段奥呂』『経緯奥呂』『古事記神典奥呂』などと題するものがある（『富士谷御杖集』）。

——香川大学助教授——